

Title	習俗雑記(宮武省三著, 坂本書店發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.4 (1927. 12) ,p.160(634)- 162(636)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19271200-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

白山と呼ばれるも其の實、加賀越前飛驒の三國に跨り、古來富士立山と共に三名山と推稱せられて其の開創は古く、養老年間越前の僧泰澄が弟子淨定と共に大雪を冒して登山修業し、時に出現の十一面觀世音の奇瑞に接して、泰澄渴仰の餘り其の木像を自刻安置し之れを白山禪頂妙理大權現と崇敬し、後屢往來して荆棘を截り、峻阪を担いて山道を開いたと傳ふ。爾後遠近の崇敬次第に加はつて社殿となり、天長九年に加賀(白山寺)、越前(平泉寺)、美濃(長瀧寺)の三馬場を開き、各に神宮寺を建てるに至つた。後世、壽永三年木曾義仲本宮を再建し、天正八年織田信長社殿を造營、慶長十五年松平忠直の母之を修理し、元和元年幕府之を造營し、明暦元年三月前田綱紀の母之を修築せんとして加越兩國の紛争をかもし、因つて寛文八年に至つて幕府の直轄となつて越前平泉寺に社務を執掌せしめた。後、明治五年十一月太政官の裁決によつて加賀國能美郡に編入せられ、同七年三月白山比咩神社の本社となり、同年七月神佛混淆禁止の令によつて佛像は白峯村林西寺に移され、十年本社之稱を改めて奥の宮と稱するに至つたのである。

猶、本書には圖版として敬泉畫伯の筆になる白山繪圖等の彩色版を始め鮮明なる寫眞版百餘圖を挿入して讀者の參考となる處勿論で、近時登山者の激增する折からかゝる有益の報告書の公刊せられたのは誠に慶賀すべきで、同山登山者には必讀のものとして勸める。最後に本調査に従事せられた市村安田兩氏に敬意をし、且調査報告書公刊の節々、寄贈せられる石川縣に深甚の敬謝の意を表する次第である。(二、九、廿七、武田勝藏)

習 俗 雜 記

(宮武二省三著)
(坂本書店發行)

本書は主として九州の俚俗異聞を採録したもので、收むる中には既に廢たれ、或は將に廢れむとする殊異な風俗もあり、同方面に興味を抱き研究する諸賢の參考となるべきは勿論である。この夏一讀したので、本書の内容を紹介する。

最近、民俗研究が盛んとなりつゝあるは慶賀すべきで、又民俗も風儀上甚しく害なき限りは何んとかして保存の法を講ぜられ度いものである。父祖の殘した民俗は民謡と共に棄て難い貴重な郷土資料たることは云ふ迄もなからう。

彦山峰入と猿子眠——豊前豊後筑前の三國に跨がり、景勝の稱のみならず、神韻に豊富な點に於て西海第一稱ある彦山で、役の行者關基以來行はる修驗者の峰入に關して面白く記述し、其の修驗者は入峰中には平臥を許さず、『カザル』とて脊の笈に凭れたまま眠る。これは、自然の法則にかなひ、所謂「猿子眠」であると附言せられて居る。

荒神と俗信——我國に於ける荒神様(靈神)の信仰は中々古く、従つて是に關する種々の俗信が多い。著者はこの荒神様の御本體と其の信仰に就いて述べ、各地の諸例を掲げて居る。昨今住宅は瓦斯電氣の利用の盛んなるにつれて荒神様の設もなくなつた。従つて花屋には白粉を塗り付けた荒神様を見る事が少くなつた。

牛深女と其俗謠に就て——牛深は天草下島の南端にある一小港で、著者は『九州をぶらついた方なら直ぐッあの鯛と給仕女と名所かと天窓に響くところである』と云ひ、此の邊陲な地には

「牛深三度行きや三度裸、鍋釜賣ても酒盛して来い」といふ俗謡がある處で、著者はこの意味を詳説し最後に『鍋釜賣ても情調が次第に薄らぎつゝ在ても牛深は依然海上の一樂園として *Paradise* がある」と信ずるのである』と筆を結んで居る。

大阪天王寺の布袋と紙衣佛——天王寺の布袋と紙衣佛との信仰に就いて記したもので、前者は母乳後者は疾病平癒を祈願する。

古賀風呂に就て——九州佐賀地方の古賀風呂（二各村風呂、モヤ風呂）に就いて説明し、古賀とは一地域の區劃の呼稱で、古賀風呂とは「古賀別け」に立てた風呂の意味で、古賀は古語空閑て即ち村の意味である。

數方庭祭と塵輪——數方庭（スホウテン）釜は山口縣長府忌宮神社に於て例年八月に、一週間行はれる夜祭で、神功皇后の三韓征伐出陣凱旋の旌旗の遺式と傳へ轍又は切籜を以て境内の六角龜形に疊まれ石の周圍を匝るのである。其の石の下には三韓征伐の節彼の間諜塵輪を埋めたと傳へ、其怨靈の祟を怖れて供養の爲め其の周圍を巡ぐるのであると。猶筑後三潯郡大善寺村玉乘宮の追儼式にサンリンを平げ、首を刎れる手振を演ずるも亦これに類するものである。

雞に關する傳説と民俗——雞鳴に關する傳説を始め各種の傳説を記述したもの。

豊前善光寺のお手判——九州日豊線の豊前善光寺驛近くの善光寺は日本三善光寺の一に算へられ、こゝに信者が隨喜湯仰の如來摩頂のお手判といふものがあり、これを額に押して貰ひ安心立命を得るといふ珍寶に就いて述べてある。

ゆもじと迷信——ゆもじの種々神祕的な奇抜な禁壓の役目と其の效驗に就いて記述したもの。

箕のはなし——豊前で箕を脊を外にして戸口又は土壁に免せかけるを打首の軌の形とて忌む凡等に就いて記しある。

糞尿奇聞——糞尿に關する奇習書に就いて記してある。

唾吐く事に就て——吐唾して惡氣を拂ふ風習等に就いて記してある。

豊後唐人——豊後言葉の難解なために、他國人が唐人の言葉だといふ。

彦島のサイアガリ——關門海峡の彦島に鎮座する八幡宮神事サイアガリ祭と其由來に就いて記してある。

玄猪雜記——玄の子の行事と、エツタの玄の子に就いて記しある。

いもじ十連といふ土佐の俚諺に就て——土佐の本山の俚諺に人が遮面つくるを『いもじの連と』と云ふ由來に就いて記し、其の「いもじ」は芋莖で芋莖は破巖工事に役立つといふ。

厄年と奇風——厄年と厄落等に就いて記してある。

福智山々法——徳川時代に於て豊前筑前の國境、福智山の山林保護法に就いて記してある。

石投げパンブウと黒竹の杖——平戸熊本邊で竹を「パンブウ」と云ひ（藩政時代に豊前企政郡に子供役とて、黒竹杖を手にして管内を巡回して、上納米以前に米を持運ぶ者を取締に警官格の役人があつた。

噓のはなし——噓の禍福に就いての話。

蚊帳に就て——蚊帳の釣初め、釣手等に就いての話。

コブ雜談——蜘蛛に關する話で九州では蜘蛛をコブと云ふ。

夢と俚諺——佐賀郡地方の諺「夢百日播きしを、三日刈しを」等に就いて記述し、是は夢の播期のまちまちであるにもかゝらず、其の刈入時は梅雨等を控えるので精々三日位の差があるとの意義である。

河童のはなし——肥後八代地方では游泳の時河童除けとして佛前の飯を喰うとか、鳳仙花で足指を赤く染めなどを始め、九州各地の河童話を集めたもの。

石楠草と通草子の俚諺——兩者の俚諺に就いて記したもの。(昭和二、八、一、武田勝藏)

飛 驒 史 料 維新前後之一

(岡村利平編
飛驒史談會刊行)

本書は岡村利平氏の撰史備用として蒐集せられた太古より明治に至る史料中、維新前後の一部(元治元年正月——明治元年六月中旬)を印行せられたものである。毎條の首に綱文を置いて其の事件の概要を摘録し、次に史料を列載して、同時代に於ける周囲の状況を知る唯一の書である。本書は飛驒を郷里とする人は勿論、維新史研究者の一覽すべきものである。

猶本書の印行を同地の史家として有名な陸軍中將押上森藏翁の勸告並に捐資によると云ふが、不幸にして翁は本書の印刷中に逝去あつて其の完成を見られざりしと。筆者は故翁には各種研究會に同席し、研究旅行に同行して屢高説を拜聴し、其の聲今猶ほ耳

朶に存して居る。過般其の訃報を聞いて哀悼の念に堪へず、今本書印行の次第を讀んで更に追憶の念を深くするものである。

本會はかく有益の良書を研究用として寄贈せられし飛驒史談會に感謝の意を表し、且つ右續編も不日學會の爲に印行あつて故翁の靈を弔慰せられむ事を切望して止まない次第である。(二、十、一、武田勝藏)

東京 近郊 史蹟案内 (一高史談會編 古今書院發行)

本書は、一高史談會が、實地史學演習の爲め、大正二年より以降數十回にわたつて、東京近郊の史跡踏査研究の結果、成れるものであつて、世間にありふれた、この種の案内書と、類を異にする眞面目なる研究的なるものである。従つて、一般讀者にも、専門の歴史家にとりても、好同伴たるは疑ない。

本書は、先づ總説として、本書の範圍の地理的、歴史的沿革の概要を叙し、各説に對する意義、及び關係を明かにしてゐる。而して、各説は章別に凡そ一日の行程を規準として、大體南から右廻りに排列し、各史蹟については、その現状、沿革、關係事項等を、道順に説明し、且つ、説明の事項に従つて、活字を組みかへ、一見判別に便にしてゐる。更に部分參考書、參考論文等は、適宜に文中に挿入し、一般的參考書は、別に卷末に附録として載せ、合せて簡単に内容の得失長短について、短評を加へてゐる。而ほ又、陸地測量部の地圖を併用するやうに、道順を示し、殊に史跡檢出の便を計り、索引、並びに年號表を、附して、飽くまでも觀